96 5/4

自由席

伝説となった"造反教官"

元神戸大講師 松下昇の沈黙

全国で吹き荒れた大学紛争からすでに四半世紀が過ぎた。あの時代を共通体験した人間にとって伝説的な一人の学者が亡くなった。

松下昇さん。神戸大学教養部の"造反教官"として知られた元講師（ドイツ語）。今月6日、自宅近くの路上で急性心不全のため亡くなった。60歳だった。「死亡の通知はどこへも不要。風のたよりに任せる。葬儀はしない。遺品は譲渡、複写、刊行せず、基本的に廃棄してよい」という遺書が残されていた。

神戸大教養部（当時）の教授会に出席した松下さん＝1970年1月

松下さんは神戸大学紛争のさなかに「旧大学秩序の維持に役立つ、いっさいの労働（授業、試験）を放棄する」と宣言。学生たちが既成の大学秩序のあり方を問うていると受け止め、この問題が解決しない限り授業するのは意味がない、とバリケード封鎖を支持。68年度後期のドイツ語の試験で受講者全員に0点（100点満点）をつけた。

研究室占拠、自主講座などゲリラ闘争を繰り広げ、兵庫県警に逮捕され、70年10月に懲戒免職。その後も大学内の廊下でタコ焼き屋を開業し、「大学は、思想を不問にし、数多くの学生を、国家権力に売り渡した。いまの学園の見せかけの平和は、自由を奪われた強制収容所の平和と変わりない」と抗議していた。

大学とはなにか。その問いかけは時の流れとともに消えていった。翻訳の仕事もなくなり、その生活は苦しかったようで、松下さんは「年収80万円」と個人文集に記していた。神戸市内の書店員、元正章さんは「ある時、婦人問題の専門書を注文され、1万円以上の定価だったが、千円ぐらいと思っていたらしい。また来ますということで、数週間後にお金をくれた。高い本ですね、というと、『実は、1ページ分だけ資料として必要だったのです』と、気恥ずかしそうだった。彼は、その金を得るために、どれだけ働いたことか。しかし、彼から困っているといった声は一切聞かなかった。彼が貧しいとは、一度として感じたこともなかった」としのんでいた。

かつて「全共闘世代」から大きな共感をもって読まれた作家、高橋和巳の没後25周年を記念して「高橋和巳コレクション」（全10巻）の刊行が始まった。最後に「大学解体」まで語った高橋の作品は青春文学として若い世代に読みつがれていくかもしれない。

一方の松下さんは、「遺品は譲渡、複写、刊行をせず」と言い残し、沈黙したまま8日昼ごろ、六甲山ろくの煙となって旅立った。「その人生の一貫性、倫理性において世間的な価値観では測れない人だ」と元さんはいう。ずっと以前、松下さんの奥さんは「あの人は異星人なのです。21世紀に生きている人なのです」とも語っていたそうだが、まさに伝説、神話の人となった。

今年初め、「松下さんを講師に大震災の勉強会を開くので来ないか」と友人から誘われたが、顔を出さずにいた。いまとなっては何ともいえない気持ちだ。いまはただ、そういう人がいた、ということだけを書きとめておきたい。

26日、神戸市内で追悼会が開かれる。問い合わせは友田さん（078・861・3854）へ。

【池田 知隆】